「比較の概念」遠ざけた島嶼的独自性

列島保全への課題

日本人のアイデンティティ

人間存在を理解しようとするときには、他者の目が絶対に必要になってくるものである。人間は一人では人間であり得ない。他者を自覚してこそ自己は存在できる。これはすなわち、他者との比較ということ。比較する精神があってこそ、ものごとを知り、学ぶこともできる。

しかし、比べることがものを考える基本であるという発想は、日本ではあまり浸透していない。日本人としてのアイデンティティを持とうと思ったら、本当ならば他国の人々と比べてこそ浮かび上がってくるはずだが、そうはしない。

日本は四方を海で隔てられている。それによって、「よそ」から来る存在との付き合いが希薄だった時代がずいぶん長かった。日本人が比較の概念を遠ざけてしまった要因は、そこにもあるのかもしれない。長い鎖国の時代まであったのだから、これはやむを得ないところか。

時はすでに21世紀である。風習や体格が違う「よそ」の人たちとは付き合わないなどとは、言っていられない。今はさまざまなレベルで、異なる地域、文化、民族との交流がある。比べることを拒否するのは不自然極まりないし、そんなことでは他者とも自己とも向き合うことはできもしない。

■ □

上の図①の世界地図は、アメリカやヨーロッパで通常用いられる世界地図だが、大西洋を中心にしてアメリカとヨーロッパが地図の真ん中になっている。欧米人が用いるのだから、このような地図になるのは当然で、日本や中国などの東アジア地域は地図の右端（ヨーロッパから見て東の方角）にあることがわかる。地球の北の果てが「北極」、南の果てが「南極」と呼ばれるのと同様に、欧米人から見て東の果てにある日本が「極東」と呼ばれる所以である。

また、左ページの図②は、ふだん見慣れた北が上になる日本地図を回転させて、南を上にした「環日本海諸国図（通称＝逆さ地図）」であるが、この地図をみると、東アジア地域での日本の国土について、いろいろなことがわかる。古代の日本は、朝鮮半島や中国から仏教などの進んだ文化が入ってきた。朝鮮半島や中国から見ると、海の向こう側に島国があって、その島国のかたちはこの地図のように見えたのだろう。いまでこそ太平洋側の方に大きな都市や大きな港がたくさんあるが、古代の日本では日本海側が外国とつながる玄関口だった。また、こうして見ると、日本海は日本とユーラシア大陸に囲まれた大きな湖のようにも見える。

さらに、ロシアのウラジオストク港、韓国の釜山港や仁川港、中国の大連港・天津港・青島港・上海港・寧波港などの重要な港から、東南アジアや北アメリカに向けて太平洋に出るためには、必ず日本付近の海峡を通過しなければならないことがよくわかる。東アジアの国々にとって、日本列島は太平洋への出入口となっているのだ。これらの地図は、日本が欧米や東アジアの国々からどのように見られているか、見られてきたか、という視点をわれわれ日本人に与えてくれる。

20世紀最大の歴史家のひとりとして数えられるフェルナン・ブローデルは、彼の著したリセ（フランスの高等学校）の世界史教科書において、「日本は人の住むさいはての国である。」としたうえで、「きわめて早く6世紀頃から中国的日本とでもいうべきものが存在してきたし、1868年からは西洋的日本がはじまり、その大成功は内外から認められている。しかし、こうした数々の重要な経験のそれぞれも、つまりは『日本的』日本の中に溶けこんでしまっている。この『日本的』日本なるものの島嶼的独自性は疑問の余地のないものなのである。小庭園と茶道と満開の桜の国では、中国経由で伝来してきた仏教でさえも日本風につくりなおされてしまう。」と、日本人の特徴を見事なまでに表現している。

■ □

人類は、旧約聖書の時代から、外部からの侵略とそれに伴う大量虐殺を絶え間なく経験してきた。人は愛する者の悲惨な死に遭遇したとき、この悲劇は二度とあってはならないと決意する。この決意のもと、西欧の都市国家や中国は、堅固な城壁を築くとともに、敵の攻撃を防ぎ、あるいは復讐するために情報を集めて分析し、より効果的な殺傷を可能にする武器を開発してきた。この根絶やしに殺すか殺されるかの厳しい戦いの日常を通じて人々は、勝つための、もしくは負け戦でも味方の被害を最小限にとどめるための準備をする合理的・長期的な思考を身につけていった。

翻って日本人は、他国の侵入による大量虐殺や、民族間の無差別殺戮の経験がないという世界でも稀有な存在である。その一方で日本は、多くの命が一瞬にして失われる破壊的な自然災害を繰り返し経験してきた。わが国の歴史は自然災害の歴史といっても過言ではない。地震や津波は、誰かが悪いのではない。そうすると、この死をいつまでも嘆いたり恨んだりしていられない。頻発する自然の猛威によって命を落としてきた日本人は、愛する者の死を合理的な思考と手段によって避けることができなかったために、天がもたらした災厄とそれによる死を受け入れ、復興に向けて粛々と立ち上がる勤勉性を身につけてきた。

これまで恵みをもたらしてくれている大地が動いたのであるから、この大地を恨んでもしかたがない。これからも大地に依って生きていくしかないのだからと。震災後、海外メディアでは、被災者の忍耐力や秩序だった行動を賞賛する報道が相次いだが、悲惨な災害に遭遇しても取り乱すことのない態度の背景には、この、自然災害が引き起こす大量死を受け入れてきた日本人独自の心性があるように思う。

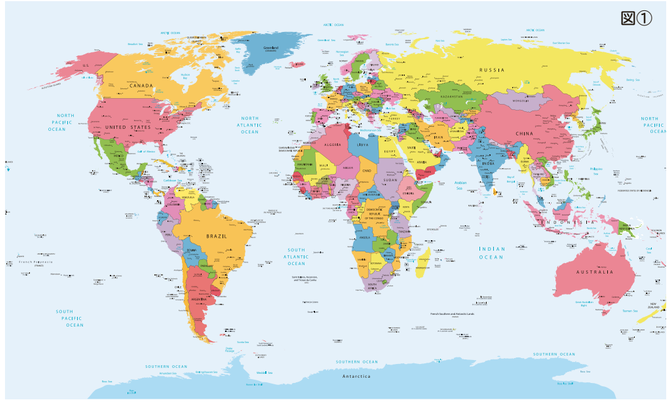
■ □

アイデンティティは、グローバル時代に活躍するためには、きわめて重要な概念だ。私たち日本人とは何か、私とは何か、といったようなことを見つめる姿勢、そしてそれを意識することがアイデンティティというものだが、実は、日本語には、アイデンティティに該当する言葉がない。言葉がないということは当然、その概念を持たないということであり、自分とは何かということを見つめる必要がない、考える必要がないという暮らしを長い間、私たちはしてきたことになる。

これは、わが国が約2000キロものの対馬海峡によって大陸や半島と隔てた位置にあって、海外からの本格的な侵略を経験しないで済んできたという国土の自然条件の賜にほかならない。

一方、外部からの侵略とそれに伴う大量虐殺を絶え間なく経験してきた世界の人々は、勝つための合理的・長期的な思考を身につけ、一人一人が独立した人格として、自らのアイデンティティを明確に持つようになったのである。

われわれ日本人だけが、自分というものに対する理念をもたない、アイデンティティがないということになると、外国人から尊敬されたり、高いレベルでの人間関係を築くことはできないのだ、ということは十二分に自覚しておかなければならない。



ハンディ10項目（脆弱国土の制約）

① 国土形状	南北2,000㎞、東西2,000㎞に及ぶ細長い国土（幅は最大で250㎞程度）
② 四　島	海峡により陸地が分断。多数の島嶼部で構成
③ 脊梁山脈	細長い国土を2000m級の山脈が縦貫し、日本海側と太平洋側に二分。河川は急勾配で短く、流域面積も小さい（国土は109の一級水系と2722の二級水系が作る分水嶺で細かく分割）
④ 地　質	国土面積の70%を占める山岳地帯は、崩落しやすい風化岩や複雑な岩種で構成
⑤ 平　野	河口部か山間盆地にしか平野が無く、狭い平野が分散している上に、国土面積に対する比率が小さい（低地：13%、台地：12%）。全ての大都市は河川の氾濫区域に存在
⑥ 軟弱地盤	大都市区域のほとんどが軟弱地盤の上にある
⑦ 地震・津波	国土面積が世界の地表面積の0.25%しかないのに、マグニチュード4以上の地震の約10%が日本で発生（マグニチュード6以上では全世界の20%）
⑧ 豪　雨	多雨：地球総平均（800㍉）の2倍以上の年間降雨（1,400～1,600㍉）があるが、梅雨末期と台風期に集中（⇒脆弱な水資源、大きな災害リスク）
⑨ 強　風	台風の通り道に沿うかたちで列島が展開
⑩ 豪　雪	国土面積の60%が積雪寒冷地域（年間累計降雪深4m超の豪雪地帯に大都市が存在）

国土と日本人
災害大国の生き方
大石久和著

山地が7割を占め、地震や台風にしばしば見舞われる日本。この試練の多い土地に住み着いた日本人は、古来、道を通し、川筋を変え、営々と自然に働きかけてきました。私たちが見る風景は、自然と人が共に造り上げたものなのです。本書は、まず日本の国土の地形的・社会的特徴を明らかにします。さらに大震災に見舞われ、財政危機にある今、海外に伍して豊かな国土を築き上げ、日本人が再び活力を取り戻すために何が必要かを提言しています。

発行：中央公論新社
定価：882円（本体840円）

日本人はなぜ大災害を受け止めることができるのか
大石久和著

東日本大震災後、大きな混乱や犯罪が起こらず、粛々と運命を受け入れ、前向きに生きる被災者の姿に、世界中の人が驚嘆しました。その国民性の秘密はじつは「国土」にありました。

日本は、国土のいたるところで大地震が起こる可能性があり、台風、豪雨、豪雪といった自然災害と常に向き合うという国です。また、古来、西欧・中国の都市では必ず見られる城壁を持たない稀有な国でもありました。この世界に類を見ない日本の風土が日本人の精神、考え方に大きな影響を及ぼしています。本書は、日本国土が影響を与えた日本人の姿を、世界と比較しながら解き明かしていく、ユニークな日本人論となっています。

発行：海竜社
定価：1,575円（本体1,500円）

おおいし・ひさかず　建設省道路局長、国土交通省技監を経て、2004年より財団法人国土技術研究センター理事長。京都大学大学院特命教授なども勤める。